

令和六年 秋の課題作文・読書感想文

〈塾長講評〉

今夏、二〇二四パリオリンピックが開催されました。今回の課題作文ではその中の一つのシーンを切り取って努力の意義について考えてもらいましたが、予想以上にオリンピックにそこまで関心を持っていない生徒が多かったようです。つくづく「多様性の時代だなあ」と思い知らされました。私自身も題材選びの際の感覚をアップデートしていかねばならないと再認識した次第です。

さて、ここからは受賞作品の紹介です。小学生には例年通り読書感想文に取り組んでもらいましたが、今回初めて金賞受賞作品が「該当なし」となっています。銀賞受賞作品は物語の中にあつた「うそをついた」と「うそをついてしまった」という表現の違いに注目している点は素晴らしかったです。しかし、感想文中に部分的な論理の飛躍があつて金賞受賞には至りませんでした。清書前に自分で読み直してみることで改善できると思つたので個別にアドバイスをしております。また、前回に引き続き小学生ながら中学生向けの課題作文に挑戦し「世界の州ごとに特技が異なつていて国別メダル獲得数の違いにもつながっているのではないか」という視点を盛り込んでいた作文には特別賞を差し上げました。その他、惜しくも受賞を逃した他の感想文の中にも素晴らしい視点が含まれているものがありました。受賞に至らなかつたのはズバリ文字数が不足していたからです。「八百字以内」という条件ならば、概ねその九割の七百二十

字が最低ラインとなると思ってください。どんなに内容が良かったとしても制限字数の半分強では高評価は得られません。これは小中学生共通で肝に銘じて欲しいです。

続けて中学生の部です。金賞・銀賞それぞれ二つの作品が選出されました。テキストは異なるもののそれぞれ課題文や資料から正しい学びを得ていて「わたくしごと化」している点が評価されました。金賞受賞作品は全文を公開しますのでぜひ一読し、自分とは異なる視点や表現を探して取り入れて欲しいと思います。また、受賞を逃した作文の中にも同じように良い学びを得ていながらも「資料を読み取る」という条件から逸脱していて残念ながら選考外となってしまうものがいくつもありました。前述の「制限字数の九割は書こう」と同様に、課されている条件を守って書くという意識を強めて欲しいものです。

今回の課題に含まれている資料Ⅱのグラフは経験則的なものではありませんが、一面の真理であると捉えています。努力を始めると人はすぐに成果を望みがちですが、現実はその甘くはありません。講師と生徒との面談の場でも生徒から「効率の良い勉強方法を教えてください」という声がよく上がりますが、まずは覚えるということ、練習を重ねるということに時間を掛けるべきです。その努力が一定量を超えた時点で初めてブレイクスルーポイントに巡り合えるのです。そう信じてまずは時間を掛けるのだという意識をもってそれぞれの目標に向けて努力を続けてくれることを願っています。